

『評価』 作：ポチ子

『評価』 作：ポチ子

私が死んだら、

私の言葉たちは評価されるだろうか。

こんな軽くて適当な言葉が、

重く、深い、なんて言われたりして。

そうだ。

死ぬにしても、

どんな死に方が良いだろう。

自殺とか、病死とか、

死の方によっても、

評価のされ方は多分違う。

恋のもつれで服毒とか、

病床で書いた詩とか、

キャッチーな方がきつといい。

ああ、

死んだ後のことだから、

どう思われるかだなんて、

私には関係ないのか。

私が息をしている時は、

見てくれもしなかったくせに、

私がそこにいる時は、

気づきもしなかったくせに。

死んだ途端に、何でもいって構わないと、

我が物顔で、私を語る人の顔を思い浮かべて、

吐き気がした。

— 終わり —